

秋集
花卉
圖

秋集
花卉
園

青樹叢書第十六篇

鳥 塚 仁

昭和四十二年八月十五日印刷
昭和四十二年八月二十五日發行
【非売品】

埼玉県大里郡寄居町大字鉢形八二七

著者兼 鳥 塚 仁
發行者

埼玉県大里郡寄居町大字寄居五三五の一
田島印刷所

印刷者 田 島 信 雄

埼玉県大里郡寄居町公民館内

發行所 青 樹 歌 会

青樹叢書第十六篇

目次

昭和三十五年（九七首）		一
昭和三十六年（一〇九首）		二六
昭和三十七年（九一首）		五七
昭和三十八年（九七首）		八三
昭和三十九年（一一九首）		一〇九
昭和四十年（一二二首）		一四二
昭和四十一年（一〇〇首）		一七一
あとがき		二〇一

昭和三十五年

田の溝を引入れて飼ふ寒水にこの池の鯉数多
死にたる

寒水に死にて浮べる鯉多く澄みし水底にいく
つかしづむ

二三寸の鯉死にたるが腹白く水の落口に五六
尾浮かぶ

鯉居ぬと思ひし池の片隅にかたまり遊ぶ大き
真鯉は

ブルーノ・タウトが日本に來りしばらくを住
みし家丘の上に小さし
小林山達磨寺

犬のハンドバック抱へ歩める孫娘今年五才の
春を迎へし

年の始炬燵にて見し大輪のパンジーの白花の
うすき花片

櫟林に尾長鳥^{をなが}集り騒がしき声を立て居り寒き
冬の日

枯萱^{かん}山丸ろきにさせる春の光小松の緑なかに
まじりて

風呂をたく煙家内にこもれるに帰り来し夜の
戸を開け放つ

風呂をたく煙こもれる家のなかわびしく冬の
一日の暮るる

某家庭園

広からぬ庭に据えたる三波川の石十ばかり色とりどりに

赤・白・黒とりどりの石すえたるが庭を狭めて
明るく思ほゆ

この庭にすえたる紅き石一つ日影移るに色変
るといふ

くれなるの大石一つ落日の光のくぐもりに紫
に見ゆ

家蔭の巖の苔は乾きゐて頂に松の小苗植ゑた
り

流れ出ずる枯山水の上に石橋を渡せし処にて
工事止めあり

傾ける藁屋根こぼち小さくせし御堂立ちたり
墓のもなかに

暖かき日のつづきたる二月尽宵降りし雨に霜
降りにけり

朝床に再び眠りたる前に二声ばかり聞きしう
ぐひす

ふくみ声に夜半鳴くは墓の声と思ふこのごろ
二夜三夜つづきたり

椿の花多くなりたる生垣の連翹の花まばらに
咲きぬ

曼珠沙華の葉を伸ばしたる枯生には東一華の
花二三株

二月余り待ちたる雨は庭先のほけし猫柳をぬ
らししばかりに

アカシヤ林冬枯のさまにあるなかに黄けまん
草の花咲く群落

杉苗の植ゑられし斜面下りなづむに群がりて
咲く堅香子の花

鎖にすがり上り来りし頂は岩を輝^{きら}して八汐の
盛り

上野国分寺趾及山王塔趾

たづさはり来し友の疲れのしるく見ゆ古墳め
ぐりて国分寺跡にいたる道

年経たる太き黒松の下蔭に掘り出だされし古
塔の心礎

大塔の心礎掘り出されし一処囲ひして鴟尾

根卷石など並べあり

塔の礎石いくつ群がる野づかさに立てば毛の

国は芽ぶきの時ぞ

塔の礎石並ぶ傍への銀杏二本桑畑拡がるなかに芽吹きぬ

寺趾に世代変れば礎石の上御嶽大神・大黒天などの碑^{いしより}立てにき

国分寺趾より帰る田の道布目瓦の破片敷きあり
十米程

友の家の庭に影さす檀まゆらの木若葉と共に花梗の
びいでし

春嵐強く吹くらし車窓まど外は若葉野の上を土埃ほこり
流れゆく

雨水ににごる神池青若葉の影をうつして夕べ
ひそけし

若葉影うつる水面の一处赤きはせいがい楓の
若葉

定 峯 峠

いかり草淡紫に秀づるを落葉くさりし土より
掘りぬ

植林の杉未だ低き山原に若人の群散らばりあ
そぶ

植林の杉未だ低き山原にいかり草を掘る友ら
あちこちに

山の真上をめぐりて飛べる一羽の鴉羽ばたき
をしばし止むる時あり

春山に昼餉開ける吾らの上を低く飛びたり一
羽の鴉

頂は未だはるかなり道のべに生ひ出でし蕨折
りつつ行くも

尾根をめぐる防火線に咲く春草のなかより集
む数種類のすみれ

夜の部屋にカルセオラリアの真紅の花たわみ
群れ咲くこぼるるばかり

幼女おきなめがあまた金魚鉢に入れし目高ゆうべに見
れば二つ三つ死す

深谿に拡がる若葉のなかに立つ枳の立房群が
る梢